

■近畿双松会設立65周年記念講演会

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）、今を生きる！

【講師ご紹介】小泉 凡 氏

1961年 東京生まれ。小泉八雲の曾孫。日本ペンクラブ会員。成城大学（院）修了、専門は民俗学。

1987年に島根県松江市へ赴任。島根県立大学で教鞭をとりつつ、妖怪・怪談を切り口に、文化資源を発掘し観光・文化創造に生かす実践研究や、小泉八雲の「オープン・マインド」を社会に活かすプロジェクトを世界のゆかりの地で展開する。

現在、小泉八雲記念館館長・焼津小泉八雲記念館名誉館長・島根県立大学短期大学部名誉教授。2023年1月、アカデミア賞（文化・社会部門）を受賞。

著書に『民俗学者・小泉八雲』（恒文社、1995年）、『怪談四代記―八雲のいたずら』（講談社、2014年）、『<日本の伝記 知のパイオニア>小泉八雲と妖怪』（玉川大学出版、2023年）ほか。

【講演要旨】

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の社会的意味が変貌を遂げています。作家の鑑賞・研究・顕彰という従来のあり方を超えて、現代社会がもとめる多様な切り口でクローズアップされている印象です。「オープン・マインド」「五感力」「感染症」「SDGs」「怪談の新しい表現」…。そんなキーワードから現代社会と呼応する新しいハーンの世界を探訪します。

はじめに

●大阪が大好きな八雲

- ・理想的な日本が残る（和服、和風建築、四天王寺など）
- ・東京で10年暮らすより大阪で1か月暮らす方に価値がある
- ・大阪人のキャラクターは際立っていて、シカゴ人と似ている→2023年は大阪・シカゴ姉妹都市提携50周年

1. ”The Open Mind of Lafcadio Hearn” プロジェクト

(1)ハーンの「オープン・マインド」（タキス・エフスタシウ氏の提唱）

- 「他者への公平で愛のあるまなざし」
- 西洋中心でも人間中心でもないまなざしで、五感を研ぎ澄ませて対象をみつめる
- 多様性(diversity)の尊重
- 分断・自国中心主義とは対極

(2)記念事業”The Open Mind of Lafcadio Hearn” の開催

- ・造形美術展 アテネ（2009）、松江（2010）、ニューヨーク（2011）、ニューオーリンズ（2012）
- ・2014年7月のレフカダでのシンポジウム（5か国9名のパネリスト）
- ・2015年10月、アイルランドで”The Open Mind of Lafcadio Hearn-Coming Home”を開催

- ・2019年10月、アメリカのニューヨーク・シンシナティ・ニューオーリンズで”「ハーン渡米150年記念事業”The Open Mind of Lafcadio Hearn in USA”一日米基層文化の邂逅」を開催
- ・2020年11月、南アフリカ共和国プレトリア大学主催でウェビナー開催。”The Open Mind of Lafcadio Hearn-Light from the East”

(3) 施設のオープン

- ・2014年7月、ギリシャ・レフカダに「ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター」がオープン。
- ・2015年6月、アイルランド・トラモアに”Lafcadio Hearn Japanese Gardens”がオープン。

(4) 松江の文化力を生かしたまちづくり条例（令和3年3月制定）の「めざすべきまちの姿 7つの柱」

- ①古代から近代までの豊富な文化財
- ②地域に根付く伝統文化
- ③市民生活に根づく茶の湯文化
- ④小泉八雲が五感で感じた松江の生活文化
→自分だけの価値観で物事を解釈せず、多様性を尊重する心「オープン・マインド」により、さまざまな価値を認めあうまちをめざす
- ⑤市民とともに育む芸術活動
- ⑥伝統文化芸術活動の拠点となる施設
- ⑦宍道湖、堀川、中海等の松江的景観

2. 感染症から学ぶ

- ・「流行病の兆し」”Epidemic in Embryo” 1873年、(シンシナティ時代) シンシナティ・エンクワイアラー
 - ・「目に見えない毒」”Invisible Poisons” 1881年、(ニューオーリンズ時代) デイリー・シティ・アイテム
 - ・「黄熱病」”El Vómito” 1881年、(ニューオーリンズ時代) デイリー・シティ・アイテム
 - ・「天然痘」”La Vérette” 1888年 (マルティニーク時代の体験) ハーパーズ・マンスリー
 - ・「さようなら」”Sayōnara” 1894年 (松江時代の体験) 『知られぬ日本の面影』下
 - ・「コレラ流行期」”In Cholera-Time” 1896年 (神戸時代の体験) 『心』
 - ・35歳頃、フロリダでマラリアに、38歳頃、マルティニークでは腸チフスに感染し一時は危うい状況に。
- 上記作品から、家族や血縁を超えて救いの手を差し伸べ底抜けのやさしさを発揮する人間の姿と行動を描く。

社会不安と妖怪、感染症との相関関係。→人間の力の限界、自然・異界への畏怖を学ぶ。

●八雲の衛生感覚

「衛生ニハ余程心ヲ留メテ居ラレマシテ 外出シテ帰ラレタ時又ハ筆(ペン)ヲ把テ仕事ヲサレタ後ナド 必ラズ手ヲ洗ヒウガヒヲセヌト気ガスマヌ 私方デモ二階ニ洗手場を新タニ造ツテ水甕ヲ備付ケマシタガ 此小水甕ハ八雲記念館に出シテ置キマシタ」(富田太平・妻ツネ誌「富田旅館ニ於ケル小泉八雲先生」『湖都松江』37)

「すぐに無届けの患者をさがしだして、担架と人夫をつれてやってくる。見ていると、ずいぶん残酷なようだが、しかし衛生法なんてものは、これはよろしく残酷なものでなければならない。

(It seems cruel ; but sanitary law must be cruel.)」

(平井呈一訳「コレラ流行期に」

『心』)

→比較的、厳格な衛生観念の持ち主、ウィルスからの最大の防御方法を心得ている。

3. SDGs と小泉八雲

●講演「極東の将来」(1894年1月)

……自然は過ちを犯さない。生き残る最適者は自然と最高に共存できて、わずかなものに満足できる者である。宇宙の法則とはこのようなものである。

→自然との共生とシンプルライフの必要性

(中島最吉訳、『ラフカディオ・ハーン再考—百年後の熊本から—』 所収)

●「小泉八雲ゆかりの地・山陰で学ぶSDGs」(全国街道交流会議第13回全国大会)2023年7月～ワークショップ、バスツアー等を開催

「小泉八雲のまなざしとSDGsの視点をヒントに、山陰各地での出会いや体験を通して、私たちが暮らす地域の未来を考え、自分は何ができるのかを考えよう」

4. 怪談の新しい表現

●ハーンの怪談作品のアイランド語訳(2018)、カタロニア語訳(2018)の出版

●「小泉八雲朗読のしらべ *Kwaidan*」アメリカ公演(ニューヨーク、シンシナティ、ニューオーリンズ)

出演：佐野史郎・山本恭司・小泉凡(2019)

●円城 塔 直訳『*Kwaidan*』 (KADOKAWA) (2022)

「ダン・ノ・ウラの戦いの物語を——最も悲哀の深くだりであるから」(「ミミ・ナシ・ホーイチの物語」)

「オ・ジョチューは振り返り、そうして袖を下ろすと手で顔を撫でてみせ——」(「ムジナ」)

●TENOHAMA MILANO 展示会「日本の幽霊と精霊たち」(2022.10~2023.3)

- ・主催：テノハ・ミラノ、1,100 平米の場所に、十数個の部屋
- ・部屋ごとに八雲作品のテーマが「雪女」「十六桜」「猫を描いた少年」「ろくろ首」「伊藤則資(のりすけ)」「河童」「浦島太郎(「夏の日の夢」)」「狐」「生霊」
- ・八雲怪談の世界にインスパイアされたフランス人アーティストのベンジャミン・ラコンベ(1982~)のイラストをもとに、イタリア人のクリエイティブ・ディレクターとアメリカ人のグラフィック・デザイナーが展示を作成。
- ・アニメーション、プロジェクションマッピング、サウンド効果などスケール感のある空間演出がなされ、来場者を異空間に誘う没入型エンターテインメント
- ・期間中9万5千人が来場。その多くがミラノ市民。
- ・入場料16ユーロ(約2,300円)

●アイルランド・日本交流美術展「怪談—ラフカディオ・ハーンとの邂逅」(小泉八雲記念館 2023.6.27~9.24)

アイルランドと日本を拠点とする40名のアーティストが描出する『怪談』の世界以後、日本、アイルランドの各地を巡回

おわりに：八雲がもつめたもの

●好きなもの・嫌いなもの

好き：西・夕やけ・遊泳・寂しい墓・虫・蓬萊・怪談・浦島太郎の話
マルティニーク・松江・日御碕・美保関・焼津

嫌い：うそつき・弱いものいじめ・フロックコート・ワイシャツ・ニューヨーク

●八雲が未来に伝えようとしたこと

- ・物質文明のみを追求しても豊かな社会はつくりえない。
「人生に生きる目的を与えてくれたのはゴーストです。あるものは神々と呼ばれ、あるものはデーモン、あるものはエンジェルと呼ばれましたが、彼らは人類のために世界を変化させました。彼らは私たちに生きる目的、自然を畏怖することを教えてくれました。(中略)ゴーストもエンジェルもデーモンも今はもういません。この世の中は電気と蒸気と数字の世界になってしまいました。それは味気なく、空しいことです。」 (1893.12.13付 チェンバレン宛書簡)
- ・人間と自然が共生できる社会を追い求める。→人間中心主義の考え方を否定
- ・感染症や妖怪は、人間の限界と自然を畏怖する心を教える。
- ・「オープン・マインド」で「五感」をとぎ澄ませて世界を見ることが大切。
→持続可能な未来のために、現代世界が重視するSDGsの精神とも一致

文学はけっして「終わったコンテンツ」ではない！

以上